

円盤と宇宙哲学の研究誌

— 日本GAP —

ニューズレター

No. 35

日本GAPニューズレター

— 1967 —

第35号目次

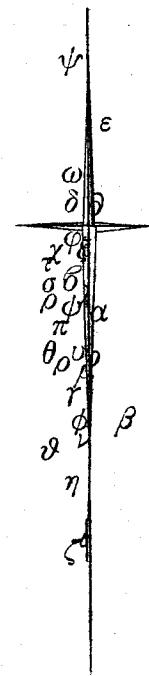
予 言 .....	C・A・ハニー	1
金星人の肖像 .....		14
モロドヴィンテム丘の怪死事件 .....	チャールズ・ボウエン	15
車輪のついたUFO .....	ジョン・A・キール	20
ルック空飛ぶ円盤特集号 .....		24
編 集 後 記 .....		33

予 言

「世界の終末まであとわずか一週間だ！」少なくともこれが多くの人々の話している話題である。宗教団体のなかには今にもアルマゲドンの戦いが起こるかのようには予言しているのがある。しかし私がこれを書いているときイスラエル対アラブ連合の戦争で全戦線にわたって戦いが展開しているけれども、この一文が読者の手に届く頃までには戦争は終わって過去の歴史となっているだろう。(注||そのとおりになった)

或る人が私に言った。「自分は生き永らえて予言が実現するのを見たいとは思わない」と。これはおかしな発言である。なぜならわれわれはみなこの生涯において今や予言が実現しつつある時代のまっただなかに生きているからである。問題は、殆どの人が実現する予言を理解したりそれと気づいたりするための手がかりを持たない点にある。

これから説明する予言はキリスト教の聖書に出てくる予言類に関するものばかりである。キリスト教以外の聖典類のなかには同種類の予言を含むものもあり、その多くはキリスト教の聖書中の予言よりも実現の年月が早いとしているけれども、ここでの説明は旧・新約聖書のキング・ジエームズ版中の予言類に限ることにする。



C・A・ハニ一

聖書はアルマゲドンの「戦い」については何も言及していない。実際にはアルマゲドンという語が全聖書中にただ一度見えているにすぎない(黙示一六・一六)。(注||アルマゲドンとは世界の終わりにおける善と悪との決戦場。これより転じて国際的な最後の大戦争をも意味する)それはヘブライ語の「ハルマゲドン」または「ハル・メギッド」から出た語である。母音が発音されないので英訳が用いられる場合はしばしば脱落する。「ヘブライ語の「ハル」は「要塞地にされた」または「要塞地にされた丘」という意味で、これが或る興味ある事実をもたらすのである。エルサレムの北西七十マイルのところエスレール谷があって、ここにメギッドがある。ハイファ港から遠からぬ位置だ。一九一七年から一九四五年までのあいだに英国は数百万ドルを投じてハイファを要塞化した。こうしてマゲドンすなわちメギッドは実際に「要塞化された丘」すなわちアルマゲドンとなったのである。ゆえに地上で発生すると考えられる未来の大戦争のいずれも「アルマゲドンの戦い」と称して差支えないだろう。

私は予言を信ずるけれども(聖書中の約三分の一は現在とこれからの数年間に関する予言で占められている)、聖書がその権威であるとは思わない。聖書が神の言葉であるとすれば他の多数の

書物も一樣に神の言葉を伝えたものということになる。これが私の考え方の欠点または奇論のように思われるならば真意を説明することにしよう。

聖書の時代には予言者（複数）は他の惑星から UFO（宇宙船）に乗って来た人々（天使）とコンタクト（接触）していた。惑星人は現代も飛来しているのだが。彼ら惑星人が天使と呼ばれたのは、当時の人々は天使または神のみが天空に存在すると信じたからである。この天使は実際には他の惑星から来た進化した人々であるという考えは、当時の人々の心に決して浮かんでこなかった。とにかく旧約聖書中の予言類の殆どはそんなふうにして得られたのだ。つまりそれらはコンタクトした惑星人から予言者たちへ伝えられた知識にはかならなかったのである。

これらの予言は実際には地球上で起こることになっている或る大計画について予告したのである。それは或る的確な目的を持ち、実現するまでに数百年を要する計画である。前記予言の実現というのは、むかし文章で書かれたとおりに地球で現在遂行されているこの大計画の一部分にすぎない。

『未来の様相』を予言者たちに伝えた人々は、その計画（予言）が計画どおりに実現しているかどうかを見るために現在この地球上で（または円盤に乗って空中で）ひそかに活動している人間と同じ人々である。

旧約聖書の二〇パーセントまたはそれ以上がまだ翻訳されていないと言えれば読者は驚くだろう。たとえば旧約中のよく知られた章であるイザヤ書について言うと、これは殆どすべて現在の米国と英国に関連した予言で満ちている。しかしこれを理解するため

の或るキイ（手がかり）がまず見つからない限り、このことを知ったり意味を解釈したりすることは殆ど不可能である。

今われわれが旧約聖書と呼んでいる書物の原本は古代カルデア人の記号文字で書かれたのであって、それはわざと記号や暗号で書かれたのである。カルデア文字の切れ目のない文が続いていて、全旧約聖書中には一語たりとも完全に綴られた語はなかった。カルデア語はイエスの時代より数百年前に行なわれた死語である。ここにチャールズ・L・ウォーン文学博士の著書『ノアの時代に似た現代』から少し引用してみよう。

「パリサイ人すなわちユダヤのマソラ学者たちはこの古代の原本のユダヤ訳を行なった。ユダヤ人の言語はわれわれがラテン文字を用いるのと同様に古代カルデアのアルファベット文字から成っているのは興味深い。

マソラ学者は母音として使用するために或る記号を考案し、この記号が元のカルデア文字のあいだに挿入された。同時に彼らは原本の切れ目のない文章を母音記号の使用によって区切り、それによって文章らしくなったのである。しかしそれでも彼らは原本の真の科学的な教えに気づかなかつた。しかも何の意味も持たない数種類の文字を語群中にしばしば入れたのである。ゆえに旧約聖書の二〇パーセントはまだ翻訳されていないと言っても過言ではない。

ご存知のようにパリサイ人はイエスにたいして友好的ではなかつた。実際イエスは次のように叱っている。「あなたがたは因襲によって神の言葉を無益なものにしてしまった」しかるに新約のキング・ジェイムズ版（注一六一一年英王ジェイムズ一世の命

によって翻訳された英訳聖書）に参画した学者によって改訳されたのはこのパリサイ聖書であった。私の知る限り、元の母音符のない原典を翻訳しようと最初の困難な試みを企てたのは私（ウォーソン博士）である。

過去の八種類の文明の興亡が記録されているのはこの母音符のない原典である。今は第九文明である。われわれはこの第九期文明の第六段階にある。それは創世記の第一章にある第六日目と一致する。母音符のない原典によれば、第六日とは人間は「神の力」を有する言葉の反映であることを人間が発見する段階である。次の第七段階は人間が労働と休息を、または自己の存在を「神の力」に頼ることをやめる段階である。

現在の時代に先行する時代はノアの時代であった。ノアという語はカルデア語の「NCH」から来ている。ところが他国の母音の導入によってこれが「インカ」と発音されることになった。この語根の定義はインカすなわちアメリカの古代文明の僧王としてその語が用いられたことを正当化する。もっと確証をあげるとこの古代民族の表意文字はカルデア原典の私の翻訳から発見した記録類を解釈するのに応用できたのである」

聖書中の予言に関する正確な知識が現代の出来事によつて一致するかを簡単に示すと、一九四八年にウォーソン博士によつて翻訳された記事を次に少々掲げることにする。これは惑星人の哲学に関する限りジョージ・アダムスキの「空飛ぶ円盤同乗記」（一九五五年刊）で始まった現代の円盤時代よりもかなり以前のことである。

「他の世界から来る使者たちがあの苦難の時代に秩序の回復を

援助するために自分と共にいるだろうとイエスはハッキリ言っている。マタイ二四・三六によれば次のとおりである。「ただしその日、その時がいつであるかはだれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」（注）第七段階が人間が労働と休息を、または自己の存在を「神の力」に頼ることをやめるとは、すなわち大変動によって人類の殆どが絶滅することを意味する）

さて例の原典からマタイを訳すと次の個所がある。「しかしイエスは語った。このような苦難が起こったとしても自分はすぐ来る。燃える大気の噴煙をくぐって来て大火災を消しとめよう。自分と共に他の世界から偉大な指導者たちが来るだろう。彼らは地球の調和ある波動を回復するのを援助するであろう」

旧約聖書のノアの洪水は単なる洪水ではなく激烈な大変災であり、しかも当時の一大文明の大破壊を意味するものであった。母音符のないカルデア原典及びギリシア語シナイ写本によれば、それはミューとアトランティス大陸の沈下をも意味するものと思われる。

読者の興味次第では予言のシリーズを書いてよいし、書物にして出してもよいと思つてゐる。そうならば母音符のないカルデア原典の翻訳のみならずキング・ジェイムズ版中の予言類の正しい解釈のためのキイを与えることになるだろう。正しい理解を得るのに必要な数種のキイが存在しているのだが、その一つは、現代の国家の身元に関する知識である。

ところがこの身元不明の結果はイスラエル対アラブ連合の争いとなつた。人々は現代のイスラエルという国は予言に出てくるイ

イスラエルのことだと思われているが、それはちがう。現代のイスラエルは予言ではユダと呼ばれており、「ユダの家」に属するのであって、「イスラエルの家」に属するのではない。聖書の予言を正しく理解するため、重要なキイの一つは、「イスラエルの家」は、ユダヤ人ではなかつた、という事実である。聖書中のイスラエルに関する予言類は現代の米國と英國に関するもので、例の大計画が地上で遂行されるにつれてこの予言類も確実に実現しているのである。

私がここで強調したいのは、この記事は決定的な文書の証明によって裏付けされているのであって、宗教とは関係がないということである。私の研究態度は徹密に聖書古代史学者のそれである。ここに現代各国の身元を少しあげることによつて徹底的に調べてみるとよいだろう。そうすればどの予言がどのような意味をなしているか、すでに実現しているかなどがわかるだろう。

米國 || マナセ、英國 || エフライム、エジプト || エジプト、ドイツ・オーストリア || アッスリヤ、現代のイスラエル || ユダ（ユダヤ人）、ロシア || トバル、メセク、サウディアラビア || イシマエル、ヨルダン || モアブ、シリア || ハガル、レバノン || ゲバル。

詩篇第八三・一—八までにおいて、この個所の予言に用いられている古代の種族名に現代の國名を代入してみると、最近のイスラエル対アラブ連合戦の記事を発見できる。特に四、五節に注目されたい。しかし欠陥もある。しかも或る一語はそれが現代の危機に言及したものでないことを明らかにしている。読者にその個所がわかるだろうか。

これと対比してイザヤ書一九・一七には次のように出ている。「ユダの地（現代のイスラエル）はエジプトびとに恐れられ、エジプトびとに語り告げられることを聞くエジプトびとはみな、万軍の主がエジプトびとにむかつて定められた計りごとのゆえに恐れる」。私はこれを次のように言ってもよい。聖書の予言によれば（ただしここではその予言の個所を指摘しない）、この時代の終りに各国がエルサレムに進撃するときには米國と英國は國家としての存在を失っているだろうと。アルマゲドンの戦いは聖書中に出ないが、最後の大戦争がエホシヤファット谷で起こるだろう。これが起こるとき米英はいない。なぜならヨーロッパの十カ國を従えた新生ドイツによつて打ちのめされて掌握されているからである。このドイツに從属した國家群は一大宗教組織のもとに同盟して活動するだろう。これについては予言で「野獸」と呼ばれている。

## II

第一章において、正しい理解のための数種類のキイこそ必須のものであると私は述べた。これなくしては聖書の予言を理解することはできないのだ。また過去の著名な無神論者の多くが聖書の予言はウソであると断言したのはこのキイを知らなかったからである。

これとは反対に、宗教団体によつては聖書の予言の実現によつて聖書が神の言葉であることがわかると称しているのがある。しかし第一章で指摘したように、予言の実現は大昔の文書中に記さ



れた計画の遂行のために他の惑星から来た人々が活動していることを示しているにすぎない。

予言そのものを詳説する前に、読者が私の見解をもっとよく理解できるようにするには少し手がかりが必要であると思う。この手がかりによって読者は高度に進化した惑星から来た人々がこの地球に関心を持つ理由や、最初に六千年にわたる大計画をたてた理由などがわかるだろう。また歴史のこの特殊な時機に彼らが大挙して来た理由もわかるようにしよう。これを説明するには歴史を数千年さかのぼらねばならない。

遠い昔、地球の最初の住人は太陽系間を航行できる巨大な宇宙船で地球へやって来た。この宇宙船は長さ数マイルのものもあって、人間の居住の準備のできたさまざまな惑星へむかって多くの志望者を運んだのである。

しかるに長い歴史を通じて数度この地球上の文明は完全に滅んだ。ときには数千年前に氷河時代を終滅させた地軸の変化のような自然の原因で、ときには手に負えないほどに科学的能力の発達した人間自身によって文明が絶滅したのである。

聖書は高度に進歩した一大文明について述べているが、これは地上が「形なく、むなしく」なるほどに完全に破壊された。これは「アダム文明」よりもはるか昔に起こったことである。「アダム文明」というのは約六千年前に始まった、聖書のアダムとイヴの物語によって描かれる文明を示すために私が用いる語である。われわれに関係のある聖書の予言類は現代のアダム文明にあてはまるのであって、第一章で述べた「大計画」なるものはこの特殊な人々の或る特殊な性質を処理するために起こされたのである。

この初期のグループ（元の十二種族）は、この太陽系の他の惑星群から追放者として種々の惑星へ移住させられた各種グループのなかで最も特殊なグループであった。ジョージ・アダムスキのITSS（邦訳「空飛ぶ円盤同乗記」）には次のように述べてある。

「人類は万物と調和して平和に暮らすことを好むのが普通ですが、所によっては利己主義と侵略思想をもって生長する者がいるかもしれませんし、彼らは貪欲なるがゆえに他に対して権力をふるうかもしれません。

しかもこのような態度が悪に至ることを、宇宙の法則にしたがって私たちが知っているにしても、この兄弟たちを束縛する自由はもたないのです。それで大昔、多くの惑星の賢者たちの会合で、このような利己主義者を生存可能な他の惑星へ連行するように決定しました。こんな場合には、多数の太陽系中の最低段階の惑星が、罪人の追放の場所として選ばれるのです。

ところで、このような理由から、始末に負えぬ者たちの新しい住家として地球が選ばれたのですが、この追放者たちはいわゆる「厄介者」でした。惑星人は彼らを抹殺することも監禁することもできなかった。というのは宇宙の法則に反するからです。しかし彼ら追放者は傲慢な性質の者ばかりでしたから、結局は自身の調和を完成せざるを得なくなるだろうと期待されたのです。

そこで彼らは多数の惑星から空艇に乗せられて地球へ輸送されたわけです。今度は最初の開拓者に与えられたような装備品や器具類などは何もありません。追放者たちはそれぞれの惑星で相当な教育を受けており、肉体を維持する上に必要な自然科学の知識

はありました。この地球という新世界では自然が供給する物質だけで、自己の知識を応用し、生活を始めねばなりません。これはつまり、彼らが働くことによって彼らのもつ才能を引き出そうとしたためであり、更に創造者の意志を奉じる万人の羊囲いの中に彼らを引きもどすことを願ったためです。

これらがあなた方の聖書でいう墮落天使です—言いかえれば、高い生命の位置から落ちて、現在の悪環境の種をまいた人間のことです—

右の引用は聖書の人間の墮落の物語と一致している。そして聖書が言っているように人間は元の「エデンの園」（高度な惑星）から追放され、自己の生活力に頼らねばならなかったのだ。人間とエデンの園とのあいだに設けられた大きなへだたりは宇宙空間それ自体であった。だから宇宙船がなければこの「墮落天使」たちは他の惑星を汚しに行こうとしても地球を脱出することができなかった。見方によればこの地球は太陽系の「監禁植民地」といってよいだろう。もっと適切な言い方をすれば、この太陽系の「精神病舎」とも言えるだろう。

ゆえに聖書は地球へ幽閉された「墮落天使」とその寡居気について語っているが、また現代のアダムの子孫の先祖についても語っているのである。過去のあらゆる指導者によって教えられた「自己発達の階段を昇り、人格を形成すること」は人類の墮落以前の状態を取りもどすための努力を意味するのである。

この墮落した人間すべての総合的な「救済計画」は数千年にわたって続けられており、現在地球上で行なわれているのはこの計画なのである。現在の地球人の起源が以上の状態であることと、

多数の生まれかわりの現象によって、今この地球に住んでいる人間は大昔に別な惑星から連行されて来た人々と同じ人間なのである。人間が生命のレッスンを学び終えるときにこそ生まれかわって元の状態に返ることが許され、長かった進歩の道は終了するだろう。これは学習の最後ではないが、少なくとも人間と元の状態とを切り離していた大きなへだたりを超えることになるだろう。

現在高度に進化した惑星群から人々が地球へ来つつある理由が二、三ある。数十世紀にわたって別な惑星から指導者や関心のある伝導者たちが地球人を指導するために来ていた。彼らは古代の予言者とコンタクトして知識を与え、それが神からの予言として聖書に記録された。今でも彼ら惑星人は、全人類のために知識を伝えようと努力する人々とコンタクトしているのである。これは面接（直接の対面）によって行なわれるのであって、霊媒の行なう種々の方法による精神的・心霊的なコンタクトが行なわれるのではない。精神的コンタクト（注||肉体は一個所に静座しながら忘我の境に入って宇宙船の幻影を見たり、それに乗ったかの如き錯覚を起こすこと）は、大計画の遂行のためのあらゆる建設的な物事に反対する「墮落人間」のリーダーたちによって演じられる魔術の一部なのである。この高度に進歩した心霊術師たちや、犠牲者に対して行なわれる催眠術師などは「悪魔や悪霊が地上のあらゆるトラブルの原因である」という信念や教えを多くの教会に植えつけるのである。だが実はいわゆる悪霊とは、超自然現象と思われている物事をひそかに演じている心霊術師にほかならない（注||日本でいう心霊術師とは少々意味が異なるようである）。さてこれで読者は古代に予言が与えられた理由、関心ある人々



(惑星人)が予言が実現するのを見守っている理由、(正しい理解が得られるならば)未来の出来事が決定されることもあるという理由などがわかるだろう。私は誤っているかもしれないが、私の意見ではまだ実現していない予言類はせいぜいこれから二十年以内に実現するだろう。

太古の「無頼漢」たちが約六千年前に地球へ連行されたとき、彼らは新生なった地球上に放たれたが、それ以前の文明の残り物が少しは残っていた。

現代の原子時代の夜明けと共に、人間は地球を完全に破壊する能力を開発したことが容易にわかってきた。これは近隣の惑星群にも大破壊をもたらすかもしれない。加うるにわれわれは遠からず自力でもって他の惑星へ旅行する能力を開発するかもしれない。だがこれは嚴重に抑制されねばならない。おそらく太古において地球を隔離した人々(別の惑星の人々)によって阻止されることも考えられる。地球人の宇宙開発の努力は或る点までは進歩することが許されるだろうが、それ以上進歩することは阻止されるかもしれない。しかし聖書の予言で述べてあるように、或る最後のな事件(複数)がこの古い世界に起こることになっており、それが「世の終り」の前に起こるはずの出来事のスケデュールを促進するのである。これについてはマタイ二四・二二で次のように言及してある。「もしその日数が少なくなれば、一人として救われる者はないでしょう」(注||これに続いて「しかし選ばれた者のためにその日数は少なくなきまします」とある)

地球へ連行された追放者は、ときどき地球へ来続けていた少数の惑星人によっていつも、特殊な人々、とみなされていた。この

少数者たちは地球人が再び進化の階段を昇ってゆくのを見守っていて、地球人の生活に干渉することなしにできるだけの援助をしてきた。この人々は聖書では「選ばれた人々」と記してあり、イスラエルの子供たち」として予言中に現われている。私はユダヤ人のことを言っているのではない。イスラエルの殆どはユダヤ人ではなかった。

彼らはきわめて困難な生活を送った。エジプトで奴隷の身となったり、砂漠で四十年間も渴したりしたが、常に彼らの幸福に関心をもった惑星人は宇宙船に乗って近辺にいた。ときとしてその宇宙船は「雲」や「火の柱」として現われたり、またときとしては積極的にこの流浪の民と運命を共にした。しかし惑星人は殆ど干渉しなかった。流浪の民にとっては体験によって学ぶことが必要だということを惑星人は心得ているからである。真に必要な場合は援助と指導を与えたけれども流浪者にかわって体験を持つことは許されなかったのである。

旧約のダニエル書に、他の惑星から来た人々とコンタクトした物語が出ている。その物語の終末は第十二章にあって、そこでは惑星人たちが「世の終り」に近い未来に実現することになっている多くの予言の最後の部分をダニエルに語っている。ダニエルは予言に関する理解力の不足を認めて意味を説明してくれと天使(惑星人)に言う。天使の答えを平易な現代英語で言いかえると次のとおりになる。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。そしてあのことについては忘れなさい。この予言(複数)は終りの時が近づくまではわからないようにして封じられることになっています。その時が来たならば或る人々は予言の意味を理解するでし

よう

旧約聖書は長いあいだ存在してきた。そうすると、終りの時が来る直前まで理解されないようにしているものは一体何だろう？ 聖書の約三分の一は予言であり、そのうち約九〇パーセントは世の終りの頃に存在している国家群にあてはまる。予言が真実だとすると、今日知られている強大な国家がなぜ聖書の予言のなかにあててないのだろう？ もちろんあててあるのだ。しかも名ざしであててある。ただし予言類を人々に理解させないようにしている暗号の一部は、この国家群を意味するために用いられた暗号なのである。

生まれかわりによってこの地球へ来ている、他の惑星出身の墮落人間<sup>①</sup>に加うるに、地球は過去長いあいだ無数の人間を受け入れてきた。そのなかには太古の墮落グループのように連行されて来て地上へ残されたものもあるし、自然の進化の一部として地球で生まれかわったのも多くいるし、例の全体的な計画の一部として一定の目的を遂行するために地球で生まれかわることを志望した人もいる。他の太陽系の無数の惑星のなかには自然の進化の段階において地球よりもはるかに低いがあるので、この特殊な発達状態に達した惑星地球にたいし、新しい人間<sup>②</sup>の無限の供給は可能である。

さて暗号の解説に返ることにしよう。この太陽系の内外の惑星から地球へ送られた元の墮落天使は聖書の予言で、アブラハムの種<sup>③</sup>となつてゐる。アブラハムは初期の植民の監督にあつてゐた惑星人に報告した。この惑星人というのは初期にサレムという所に本部を置いていたメルキゼデクという名の人で、このサレム

は現代ではエルサレムと呼ばれている。このメルキゼデクが生まれかわりによって新約聖書に出てくるイエスになった人である。この人は現在までずっと地球の人々の運命に大きな関心を寄せてきているのである。

アブラハムは地球の追放者たちの父または指導者であつたので、彼の「あがない」と進歩して元の状態に戻る方法に関する聖書の予言類がアブラハムとその子たちに与えられた。子といつてももちろん子孫を意味する。これも彼が率いた人すべてにあてはまる。旧約のアブラハムの「家族」というのは彼の種族のすべてを意味するのであつて、単に彼の個人的な家族のメンバーを意味するのではないからだ。

予言のなかでアブラハムが多くの国民の父となるはずだと述べである（創世記一七・一一五）。多くの国民や王が彼から出ることになるともいう（創世記一七・一一六）。そこでこうした約束を調べると別な予言が出てくる。すなわち彼の子孫は敵の門（複数）を支配するようになるという（門とはパナマ、スエズ両運河、ジブラルタル海峡等。創世記二二・一六一―一八と二四―一六〇）。この約束のすべてはアブラハムの子孫へ長子の生得権の一部として代々伝えられた。それはイサクとヤコブにも伝えられる。イシマエルとアブラハムの他の息子にはこの生得権が与えられなかつた。

イサクの息子エサウ（双子兄弟でヤコブの兄）は食事のために彼の生得権（長子の特権）を売った。それで彼の子孫はそれを失い、その権限はヤコブの手に渡つたのである（創世記二五・二九―三四）。

ヤコブは後にイスラエルと名を変えさせられた。創世記三五・九―一二には再び予言が与えられている。イスラエルの子孫は一国家と一連邦になることになった。

この民族に関する予言は二種類に分けられる。一つは国家群の形成、大財力等に言及し、他の一つは靈的な面に言及しているのである。

### III

聖書は二つのタイプの予言を示すために二種類の名称を持っている。一つのグループは国家群と財力に言及したもので、それは「長子の権」と呼ばれる。他の一つはもっと「靈的な」契約と、宇宙の法則の学習という正しい道に沿って人々を導く「指導者」の予言に言及したもので、これは「杖」と呼ばれた。これについて深入りする前に記憶すべき重要な箇所は創世記四九・一〇の「杖はユダを離れず」である。しかし創世記において長子の権はユダに渡らず、ヨセフとその子孫に渡ることになると出ている。聖書の予言を理解したいと思われれば第四八章に注意されたい。杖はユダ（ユダヤ人）に渡るが、長子の権はユダヤ人でないヨセフに渡ることになるのである（歴代志上五・二）。

ここは最も重要なので再述しよう。(1)杖はユダから離れないこと。権威者、統治者、王などを意味するこの杖はユダの子孫（殆どユダヤ人）に属することになり、その線からはずれてはならないことになっていた。「統治者」すなわち王権はユダの子孫に属することになり、しかも「神の国」が地上に確立されるまで存続

することになっていた。しかしその王権はいわゆるユダヤ人のなかには見出せないで、元の「イスラエルの子」の子孫のなかに見出せるだろうというのである。あとで明らかにするつもりだが、「イスラエルの子」の大多数はユダヤ人ではなかった。ユダの種族の子孫やベニヤミンやレビの息子たちの一部だけがユダヤ人として知られるようになったのである。聖書は予言の中でユダヤ人を「ユダの家」と述べており、他の種族を「イスラエルの家」と述べている。

アブラハムはセム（ノアの長子）から出たセム族であって、決してユダヤ人ではないし、イスラエル人でもない。最初のユダヤ人と最初のイスラエル人は当時まだ生まれていなかった。ユダ以前にユダヤ人は存在しなかったし、イスラエル以前にイスラエル人は存在しなかったのである。イスラエル人の元祖はヤコブであった（彼がイスラエルと名付けられた）。

創世記の第四八章には長子の権がヨセフの二人の息子に与えられた有様が記録してある。この二人の息子エフライムとマナセはイスラエルから別々な予言を与えられた。マナセ（予言を理解すればこれは現代の米国を意味する暗号なのである）は大国になることになり、一方弟のエフライムは（その子孫を通じて）諸国家の集まり、すなわち連邦になることになった。今日の英連邦が予言に出てくるエフライムである。

以上の説明の根拠を提示する前に、私は殆どの予言学者や過去の有名な評論家のすべてが見落としている或る興味深い事実を述べることにしよう。

旧約聖書に（サムエル記下七・一二―一五）杖の約束が次のよ

うに述べてある。つまりダビデの王位は決して失われぬ。それは永遠に確立されるというのである。これは詩篇八九・三一四、二八―三七、エレミヤ書三三・一七にもあるし、その他の個所にもある。

ダビデの王位は永久に存続すると予言類が断言したのに、ダビデ王国最後の王はユダのゼデキヤだとなっているために過去の有名な無神論者は聖書の予言は喜劇であるという証拠として右のみかけ上の食い違いを指摘する。しかし彼らは次の事を知らないのだ。ダビデ王国の歴史をたどってみるとソロモンが王位についていることを発見する。聖書は語る。「このようにソロモンは目の前に悪を行なった」ため「わたしは必ずあなたから国を裂き離して、それをあなたの家来に与える……ただしわたしは国をことごとくは裂き離さず、わたしのしもべダビデのために、またわたしを選んだエルサレムのために一つの部族をあなたの子に与えるであろう」(列王紀上一・六一―一三)

一つの部族が確保されたのは、ダビデの王位が永久に存続するという約束が真実なるものとして残り、破棄されないようにするためである。ソロモンの息子レハベームは王位をついだが、大変な暴君になったために民衆はそむいた(列王紀上一二・六一―九)。右の個所の第二〇節にはユダの部族のみがダビデの家に従ったとある。レハベーム王が「あなたの兄弟たるイスラエルの人々と戦うな」と命じられたとき戦争は中止されている。そこでその結果はどうなったか?

ダビデ王国のレハベーム王はエフライムとマナセによって率えられる他の十種の部族とまさに戦おうとしていた。ユダ(ユダヤ

人)の息子たちはイスラエルの人々と戦うことが許されなかった。イスラエルは二つの分離した国になった。「長子の権」はイスラエル国へ行き、「杖」はユダの家と呼ばれる国にとどまったのである。前者は今や「イスラエルの家」と呼ばれてサマリヤという首都を持った。ユダ国はユダヤと呼ばれる領土内に首都エルサレムを持ったのである。

別々な統治者と別々な都市を持つこの二つの国は数世代にわたって並立した。ユダヤの人々はユダヤ人として知られるようになったが、イスラエル国の人々は決してユダヤ人と呼ばれることなく、またユダヤ人でもなかった。イスラエルの首都はサマリヤであったため、「イスラエルの家」は予言でしばしばサマリヤと呼ばれている。この言葉が用いられる場合、それは決してユダヤ人を意味するのではない。

これを更に徹底的に解明すると、聖書中で「ユダヤ人」という語が最初に使用される個所として列王紀下一六・六にイスラエルはユダヤ人と交戦しているところがある。その前の第五節にはスリヤの王レデンはイスラエルの味方であり、ユダの王アハズを包囲したとある。こうしてイスラエルとその同盟軍はエラテからユダヤ人を追い出した。ユダヤ人はイスラエルに対抗していたので、この二種族は身元が別であることが再度判明する。一方はイスラエルで他方はユダヤである。予言を理解する前にこの区別をよく心得ねばならない。

前七二一年に「イスラエルの家」はアッシリヤ人(現在のドイツ人の先祖)によって征服され国外へ駆逐された。イスラエル人は離散したが、ユダヤ人はなおも彼らの国にとどまった(列王紀

下(一七・一八)。これは同じ十七章の前半に出てくる包圍と戦争の物語でよくわかる。

征服されたイスラエルの十部族は歴史から姿を消してしまい、今日では「消えたイスラエルの十部族」と呼ばれている。彼らの罰は二千五百年間続くことになっていった。前七二一年から西紀一八〇〇年までである。

イスラエルがアッスリヤ人に捕えられてから百三十年以上もユダヤ人はバビロンの王ネブカデネザルの手で捕囚の身となった。七十年後にこの人々の多くは(すべてユダヤ人)捕囚を許されてエルサレムとユダへ上って、各自自分の町へ帰った(エズラ記二・一)。その帰ったユダヤ人―彼らはイエスの時代にも依然としてエルサレムにいたが―はベニヤミン、ユダ、レビ人の各種族から成っていた。

さて「消えた十部族」は地上のどこにいようとまあも「長子の権」を持っていた。前出のようにユダヤ人は「杖」契約を持っていたにすぎない。彼らは「長子の権」を持たなかったのである。「消えた十部族」の人々は一八〇〇年に罰が終わったあとは「長子の権」契約を継ぐことは自由にできるはずである。読者は「長子の権」契約を記憶しておられるだろうか。マナセは世界の最大国になり、エフライムは大連邦になるといふ個所を！

永久に存続すると予言された王位は「イスラエルの家(消えた十部族)」の中心で存続し、約束どおりダビデの子孫によって継がれるだろう。歴史の研究者ならだれでもユダの王子すべてが殺されたとき王の娘数名が予言者エレミヤと共に脱走したことを知っている。エレミヤと王女たちはイスラエルの十部族と共に歴史

から姿を消したけれども、王位は脱出した王女たちによって保たれることになっていたので、それは今日地上のどこかで存在しているはずである。そうでなければ予言はだめだということになり、聖書はウソだということになって、もはや言うべきことはない。

実はその王位は今日もなお存在しているのであって、そのことは歴史で確認することができるのである。注意深く保たれてきた英王室の系図には英国の代々の君主の記録があって、現女王からさかのぼってみると百二十四君主が記されている。最初の五君主は(起源にむかって逆に見ると)次のようになる。アサ、アビヤ、レハベアム、ソロモン、詩篇作者ダビデ。私は完全な系図のユビを所持しているが、それによれば古代イスラエルのダビデへ直接さかのぼるのである。

現在の英国と米国が予言中のエフライムとマナセをあらわすという証拠に入る前に、イスラエルだけに与えられた約束を少しあげてみよう。これはユダヤ人に与えられたものではない。そのあとでユダヤ人だけに關する予言をあげることにしよう。これら予言類の如何に多くがイスラエル(英国と米国)で、そしてユダ(現在のイスラエル国)で今実現しつつあるかを読者は知ることができるだろう。

以下はイスラエルのみに關する事柄である。

1. ヤコブの名すなわちイスラエルを支える(列王紀一一・二八、三〇、三一、三七)。
2. 消える(エレミヤ書五〇・六)。今や失われた十部族といわれる。
3. モーセの律法から離れる(イザヤ書五〇・一)。ユダヤ人は

今もモーセの律法に従っている。

4. 彼らの名すなわちイスラエルを失う（イザヤ書六五・一五）
5. 彼らの言語すなわちヘブライ語を失う（イザヤ書二八・一一）。
6. ユダヤ人でない異邦人の相続財産を受け継ぐために、海の島々や、海ぞいの国々、荒廃した土地などを所有する（イザヤ書五四・一―三、二四・一五、四一・一、五八・一二）。
7. 偉大な功なり名とげた植民地開拓者になる（申命記三三・一七）。
8. イスラエルの前であっては他の民族は滅びる（申命記三三・二九、エレミヤ書三〇・一一）。
9. 万国のかしらになる（イザヤ書四一・八一―九、エレミヤ三一・七）。
10. 多くの国民が一団となる（創世記一七・四―六、三五・一一）
11. 海陸での戦いで無敵である（イザヤ書四一・一二、五四・一七）。
12. 敵の門を打ち取る（創世記二二・一七）スエズ、その他。
13. 金の貸し手になる（申命記一五・六）。
14. 君主を持つ（エレミヤ書三三・一七）。
15. ダビデの王位が存続し、国民を統治する（エレミヤ書三三・一七）
16. 救世主としてのイエスを受け入れる（イザヤ書二・一―五）
17. パレスチナを所有してユダヤ人にそこへ帰れと招く。これは英国（イスラエル）が第一次大戦でトルコからパレスチナを取ってユダヤ人にゆずり渡したときに実現した（オパデヤ書一七―一八）。この節においてはヤコブはイスラエルのかわ

りに別な名称をあらわしている（この場合は英国）。そしてエサウはドルエを意味する。

18. イサクの名で呼ばれる。すなわちイサクの名が彼らの身元をあらわす必要な部分である（創世記二一・一二）。これはイサクの子孫がイギリス諸島へ来たのちサクソンとして知られるようになったとき実現した。ヘブライ語の綴りでは母音は聞かない。それでイサクの息子はサクス・ソンと書かれる。つまり現代英語でサクソンと綴るとおりである。
19. イスラエルは「イスラエルの家」と呼ばれる十部族になる（列王紀上一・三一、イザヤ書四八・一二）。
20. イスラエルは地上にひろがって東西南北にゆきわたる（創世記二八・一四、イザヤ書四三・五六）。
21. 他国と離れて住む（申命記三三・二八、民数記二三・九）。
22. 永久に国家として存続する（サムエル記下七・一六―二四、歴代志上一七・二二―二七、エレミヤ書三一・三五―三七）。
23. イスラエル人は商業により富裕になる（申命記八・九、イザヤ書六〇・五―一、六一・六）。
24. イスラエルの新しい故郷はパレスチナの北西となる（イザヤ書四九・一二、エレミヤ書三・一八）。
25. イスラエルはライオンのようなものである（英国の象徴）（民数記二三・二四、二四・九）
26. イスラエルは他の民族を支配する。決して屈服しない（申命記一五・六）。
27. イスラエルの領土は異邦人によって決して侵略されない（サムエル記下七・一〇、イザヤ書一・一一―一四）。

28. イスラエルは海洋にたいする支配権を持つ（英国は七つの海の女王であった）（イザヤ書六〇・五、詩篇八九・二五、民数記二四・七）

29. イスラエルは二つの大国になる。最初は敵同士であったが、後に利害関係を共にする永久の友邦となる。この二国エフライムとマナセは現在の英国と米国である（創世記四八・一三—二〇）。

30. イスラエルは地上のしいたげられた者たちの安息所となり、奴隷開放者となる（イザヤ書四九・八—九、五八・六—七）。

31. イスラエルは世界を取り巻く（詩篇七五・二、イザヤ書六〇・一二、エレミヤ書一〇・一六、五一・一九、申命記三二・八一—九）。

32. イスラエルは後の世まで自分の親類関係を知らない（エゼキエル書三九・七—二八）。

右にあげた各予言はイスラエルにのみあてはまるもので、今日「イスラエルの家」の二つの主要な分割部分すなわち英米においてすべて実現しているのである。引用個所のなかには聖書の予言に関する、素人にとっては少々漠然としているのがあるかもしれないが、全編を読んで正しい文脈をつかみ、どの名がイスラエルやユダを意味するかを記憶するならば、予言類の意味がうんと明瞭になるだろう。

そこでここではユダ（ユダヤ人）だけにあてはまる十五種の予言を類別してみたい。これも今日のユダヤ人に関して実現しているし、われわれがイスラエルといているけれども、元はユダすなわち「ユダの家」と予言に出てくる現代のイスラエル国にあて

はまることに読者は注目されるだろう。次のとおりである。ユダはかつて次のようなものであった。

1. ヤコブの第四子。
  2. 身元は不明ではない。
  3. モーセの礼拝式を守っている。
  4. 彼らの名を失っていない。
  5. 彼らの言語を失っていない。
  6. 政治的な意味での土地財産の所有者ではない。
  7. 離散した種族である。
  8. 人数が少ない。
  9. 特に迫害された民である。
  10. しばしば強奪されている。
  11. 彼ら自身の国籍を持たない。
  12. 救世主としてのイエスを拒否する。
  13. 世界ののけ者になっている。
  14. 三つの種族から成っている（列王紀上一二・一七—二二）。
  15. 特殊な容貌を保っている（イザヤ書三・九）。
- 以上をイスラエルの予言の最初からの十五種類と比較すれば性質が逆であることに気づくだろう。

以前に述べたようにイスラエルは前七二一年に捕囚の身となった。一方ユダヤ人は存続し百三十五年後に捕われた（列王紀下一七・一八）。ユダヤ人の生き残りは七十年後に故郷の土地へ帰ったが、イスラエルの十部族は全然帰らず、表面上は歴史から消滅した。前記の一覧表から読者は身分と言語のこの完全な喪失も偶然に予言されていたことがわかるだろう。



## 金星人の肖像

写真は1952年11月20日、ジョージ・アダムスキーがデザート・センターで初めて円盤の乗員とコンタクトしたときの相手の姿を記憶にもとづいて画家に描かせた肖像画を撮影した写真。これは金星人で、『空飛ぶ円盤同乗記』ではオーソンという名で出てくる人。この時の目撃者は6名いる。



大抵の人は知らないけれども、『消えた十部族』の流浪の跡をたどり、今日のその存在を知ることが可能なのである。聖書は彼らがどこへ行こうとしていたか、彼らの運命がどのようなか、を語っている。次の第四章では古代のイスラエルが現代の英米であることを適確に示す明快な個所を引用しよう。それがすんだならば、聖書中に出てくる古代の予言者たちと他の惑星から来た人

たちとのコンタクトについて詳説するつもりである。読者も想像されるだろうが、こうしたコンタクトは現在もなお発生しているのである。高度に進歩した惑星から来た人々との対面によるコンタクトは定期的に行なわれていて、例の大計画の進展に関する情報交換されているのである。(以下次号)

# モロドヴィンテム丘の怪死事件

鉛のマスクを持った

二人の男はどうして

死んだのか



チャールズ・ボウエン

一九六六年八月十七日にリオデジャネイロ近くの丘の頂上で発生した二人の若いエレクトロニクス愛好家の一見無意味な死亡事件にたいする警察の調査が次々とゆきつまったとき、現場をにぎやかにし複雑にするにはどうしてもUFOの着陸報告が必要だった。

どうみてもUFO報告がびたりとくるように思われたので、警察はその状況の或る部分に「心配不要」という声明を発した。そのとき以来調査の焦点はエスピリトサント州アタフォナの或る海岸に向けられたのである。一九六六年六月十三日にその海岸で十五キロも離れた建物を振動させるほどの大爆発が発生したからだ。そこでナゾの実験が行なわれているという噂が流れていたし、その少し前には異様な装置がテストされていたカンポスの或る庭園でもナゾの実験が行なわれたという話題がひろまっていた。アタフォナの実験が何であるにしてもたしかにそこでは大爆発があったし、火の球が多数の人に見られた。実際、土地の漁夫たちは何のためらいもなく、一機の円盤が大音響と共に海中へ落下するのを見えたと断言させたのである。

庭園と海岸にいた人たちのなかにはミゲル・ホセ・ヴィアナとマヌエル・ペレイラ・デ・クルスがいたが、この両人が後にニテ

ロイのモロドヴィンテム丘でかたわらに不思議な鉛のマスクを置いたまま死ぬことになったのである。

安全錠がかけられた

報告された調査結果は興味あるものだったが、少々当惑させるようなものだった。われわれの事務所へ流れ込んできた新聞の切抜の山から察するに、ブラジルの新聞や社会は推論過多のためにゆれ動いているようだった。新方面に調査を試みると必ず新しい、意外な新事実がころがり出た。しかもこの死亡事件は起こったと思っただけもう終わっている。カンポスの庭園とアタフォナ海岸におけるはなばなしの始まりと違って、スリルと興奮で終わらないで、すずり泣きで終わったのである。

われわれの通信員たちにたいする質問の結果は、この事件はしずまった、安全錠はかけられた、という回答が引き出されるだけだった。なぜか？ この事件が真実のUFO事件のためだったからか？ それはわれわれには決してわからないだろうが、ここには記録としてこの奇怪な物語の厳然たる事実があるのだ。

死神が山頂を訪れる

ミゲル・ヴィアナ(三四)とマヌエル・ダ・クルス(三二)は両人共妻子があり、二人が住んでいたカンポス市ではかなり評判がよかった。彼らは八月十七日水曜日の午前九時にニテロイにむかってバスで出発したが、車一台と電子器具を買いにサンパウロ

へ行くのだと言ひ残していた。その際約三百万クルセイロ（約四八五英ポンド）の現金を持って出たのである。

二人が乗ったバスは午後二時頃にニテロイに着いた。雨が降っていたので、二人は同じレインコートを九千四百クルセイロで買った（注：六千六百六十クルセイロが邦貨約千円に相当する）。次に二人はバーへ行き、そこで一本のミネラル水を買った。彼らは空ビンを返したときにビン代を返してもらうため受領証を持っていた。それから午後三時十五分頃にモロドヴィンテム丘へむかつて徒歩で出発したのである。

午後五時頃に彼らが丘の高い所にすわっているのを一人の少年が見た。どうもそれが気になるので少年は翌日その場所へ行ってみた。すると二人は地面に横たわっていたので、眠っているのだろうと思つてそこを離れた。それは木曜日のことだった。土曜日すなわち八月二十日に同じ少年が丘の上で小鳥をとっていると、強い悪臭で胸がわるくなつてきた。彼は走り去つて友達に告げたので、みんなは警察へ知らせた。ミゲルとマヌエルの死体が発見されたが、二人ともきちんと背広を着て新しいレインコートをまといつていた。しかも二人の頭のそばの地上に奇妙な鉛のマスクが一個づつ置いてあつたのである。

また簡単な電気の公式と次のような文字を記した紙片が発見された。「日曜日には昼食後に一カプセル。水曜日には就寝時に一カプセル。十六時三十分予定の場所におれ。十八時三十分にかプセル（複数）を飲め。その反応が出てきたら鉛のマスクで顔の半分を保護せよ。同意の信号を待て」数日後その走り書きの筆跡は死人のいずれのものでもないことが判明した。

## ナゾの死因

サンパウロの新聞ウルティマ・オラ紙八月二十四日付によれば、ミゲルは衣服の中のプラスチック財布に十五万七千クルセイロを所持しており、一方マヌエルはポケットの中にわずか四千クルセイロしかなかったことが判明した。当然まず考えられるのは両名は襲われて強奪されたということである。多額の金は消えていたし、二人が買ったはずの電気部品の影もなかった。実際彼らの行動をたどってみるとこんな買物をした形跡はない。

解剖の結果、死体には暴行の跡はないし（ただし死体が発見されたときには腐り始めていた）、焼けた跡もなければ、内部の諸器官に毒物も検出されなかった。心臓停止の理由は何もないと伝えられた。

強盗殺人説と共に一方ミゲルとマヌエルは密輸をやつていたという説もあった。ブラジルでは通貨制限のために外国製の電子器具を入手するのは困難であるからだ。スパイだったのだという噂もあるが、肉体的暴行を何も受けていないと発表されるや、彼らの同時の死の原因に関する諸説は消え始めた。麻酔剤（例のカプセル）を飲みすぎたのかもしれないというもつとはっきりした考えを持つこともなく、官憲や新聞は二人が何か変なエレクトロニクスの実験をやつていたあいだに殺されたのではないかという憶測をした。或る解説放送者は二人が予定の信号の時刻に死んだのだと少々不吉にほめかしたりした。

ところが多くの憶測は第二次の進展によって大きくさげざげられたのである。

## U F O の出現

八月二十五日のホルナル・ド・ブラジル紙や他の新聞は、セニョーラ・グラシнда・バルボサ・コウティニョ・ダ・ソウサという社交婦人の物語をかかけて読者を驚かせた。ブラジルでは社会的身分の区別がきわめてはっきりしている。その話によると本人は八月十七日の夕方モロドヴィンテムの上空を飛ぶ異様な物体を見たというのだ。

ホルナル・ド・ブラジル紙によればセニョーラ・デ・ソウサは賢明な常識豊かな充分に信頼にあたいする婦人で、彼女の住むフオンセカの町では深く尊敬されているという。彼女の話では、子供三人と一緒にドライブしていたとき、周囲のフチから火を噴いているオレンジ色の卵型物体を見た。それはあらゆる方向に光線を放っていて、丘の頂上の上空に停止していた。彼女は車をとめて子供たちとその物体を見つめたが、そのとき物体は上昇し、続いて三、四分間垂直に降下した。

帰宅してからセニョーラは目撃したことを夫に話した。そこでソウサ氏は車で飛び出て目撃地点へ急行したが何も見えなかった。数日後に丘の上で死体が発見されたという噂がパッとひろがったとき、ソウサ氏はその惨事のニュースは妻に隠して円盤目撃の件を警察へ知らせに行った。

ホルナル・ド・ブラジル紙の報導では、警察がセニョーラとインタヴューした際に彼女は別な或る詳細な話をしたけれども、それは警察署長の命令によって秘密にされているという。

ソウサ夫人のような立派な女性が警察へ知らせるといふ思いき

った手段に出たというニュースのため俄然数名の人々が彼女の目撃を傍証しようと警察へ電話した。この人々がもつと早く申し出なかったのは彼らもその物体が空飛ぶ円盤だと思ったのと、その件については沈黙しているほうがよいと考えたからである。

### 別な鉛マスク怪死事件

ところが一九六二年にいま一人の男、テレビ技師でヘルメスという人がネヴェス付近のモロドクルセイロ丘の頂上で死体となって発見されたことが判明するに及んでナゾの事件は更に深まってきた。死体のそばに例の鉛のマスクが置いてあったのだ。推理の目標は大気圏外へ向けられるようになった。フォリャ・デ・サンパウロ紙八月三十日付が記事をかかげて、そのなかで或るヨガの教師が丘の死人たちは高周波想念波を用いてテレパシーの実験を行っていたのではないかとほのめかしたからである。その説明によると、この種の実験にはLSD-25すなわちメスカリンのような麻酔剤が神経過敏や脳の周波数を促進するために服用されるという。

一方八月二十七日に容疑者として第三の男が脚光をあびることになった。

### 第三の男

ミゲル・ヴィアナとマヌエル・ダ・クルスの友人であるエリシオ・ゴメスが偽証罪で逮捕されたが八月二十七日付ホルナル・ド・

ブラジル紙の報導によれば、死んだマヌエルの未亡人ネリ・ペレ  
イラ・ダ・クルスが夫と助手のエリシオ・ゴメスがケンカをやっ  
たときにその場に居合わせたと証言したというのである。

ゴメスが取調べを受けるや他にも多くの事柄をしゃべりだした。  
ミゲル、マヌエル、ゴメスらは心霊科学ファンであって、多くの  
ブラジル人同様に定期的に降霊会へ出席していたとか、一同は何  
かの目的を持つ秘密結社のメンバーであったが表面上は降神術に  
没頭しているようにみせかけていたとかの事実がわかってきた。  
またその地域のエレクトロニクス専門家やファンの殆どすべては  
等しく心霊術に関心があるということも判明した。おまけにミゲ  
ルとマヌエルは火星に住む人間とコンタクトしようとして熱心になっ  
ていたという。二人は多くの奇妙なエレクトロニック実験で共同  
研究していたともいうし、二人とゴメスがマヌエルの庭で或る実  
験をやっていたとき（これはマヌエルの父親が確証した）、一同  
の手になる装置が大爆発を起こしたともいう。特に一九六六年六  
月十三日の事件（海岸での爆発）に関するゴメスの談話が公表さ  
れた。

#### アタフォナ海岸の爆発

ゴメスはミゲルとマヌエルの招きによって六月十三日に彼らと  
共にアタフォナ海岸へ出向いた。一同が到着したときに強烈に輝  
く一個の物体が海岸上空へ降下してきた。そして五分後にそれが  
上昇を始めたとき目もくらむような閃光とカンボスの町をゆれ動  
かすほどの爆発が起こったのである。調査の結果、土地の漁夫た

ちは空飛ぶ円盤が海中に落下するのを見たと言った。

ここに至って今度はブラジル海空軍各情報部が例の丘の怪死事  
件と二回の爆発に関心を持っているという報導が目についてくる。  
調査した結果、ごく最近に入った情報によると、九月十六日付の  
オ・クルセイロ紙に、海軍の監視隊が六月十二日の夕方三個所の  
アマチュア無線局間に奇妙な会話の電波が流れるのを傍受したと  
いう記事が載った。この局名はCKJ-22とCK-22で、これが  
CKJ-21に送信していたのだが、会話の内容は洩らされていな  
い。しかし調べてみるとこのような局名はブラジルのアマチュア  
無線局の登録原簿に載っていないことがわかった。

調査報告が二つ右と同じ記事に出ている。一つはマスクを作る  
ために使った鉛の残りがミゲル宅の作業場で発見されたこと、ま  
た心霊学の書物も発見されたが、その中にはマスク、強烈な発光  
付随アルコール類に関する解説記事があったこと、他の一つはア  
タフォナ事件の数日前にミゲルが妹にむかって、まもなく或る重  
要な使命を遂行するけれども秘密なのでだれにも洩らせないと語  
った事実を妹が公表したというのである。ミゲルとマヌエルがモ  
ロドヴィンテム丘で死体となって発見される数日前にミゲルは右  
の言葉をくり返していた。

それ以来ブラジルの新聞にはこの事件の記事が出てこない。

#### 推 理

現在まで実に多数の自称シャイロック・ホームズが筆者の名を  
功勞者名簿に加えようとして筆者のためにこの事件の解決を試み

てくれた。しかしあの異常な死を平凡な原因だとする説は殆ど除外されてしまったことは明らかである。またゴメスと他の友人たちがニテロイから車で四時間かかるカンポスにいたことは立証されている。そのときミゲルとマヌエルは死神とのランデヴーのため丘を登っていた。エレクトロニクスと心靈術は互いに気心の合わない仲らしいという意味のオ・クルセイロ紙のくり返しはさておいて、二人が特別に興味を持っていた奇妙な実験について筆者は何とも言えない。ゆえに、ここではわれわれに特に興味ある部分、すなわちUFOの報告に関して意見を述べるだけにしよう。

一つの可能性は、あの人々は球型光体と接近しすぎて死んだということ、しかもこれはセニョーラ・ダ・ソウサが目撃した現象だということである。しかもマクスウェル・ケイド(注II) UFOと電磁武器」と題する論文をフライイング・ソーサー・レビュー誌に発表した人)は円盤の致死的効果の実例をすでにあげている。たしかに円盤との密接な接近によって生じる焼死例は死体の腐敗が始まったあとでも病理学者にもうなずけるだろう。くり返すと、アタフォナの物体も球型光体とすれば、問題の二人の紳士があのような短時間であのような二回のコンタクトをしたというのは驚くべき偶然の一致だったということになる。

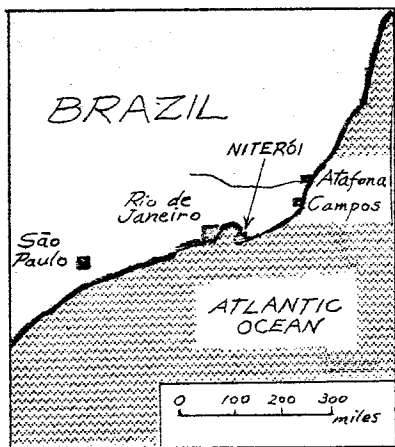
一通信員がほのめかしたところによると、カンポスの庭で実験されていた装置は故意か偶然か円盤を射ち落としたので、モロドヴィンテムの悲劇はその仕返しであり、それでミゲルとマヌエルは丘の頂上へおびき寄せられたのだという。

右のあとの方の考え方は、流布された諸説と同様に解決の糸口にならないと思う。結局、心靈術に面白半分の手を出した犠牲者

たちによって呼び起こされたのかもしれない力の性質については不明である。更に忘れてならないのは空飛ぶ円盤やその乗員はどこから来るのか、地球人のあいだにどの程度浸透しているかに関して真の手がかりはまだないということである。

ただ二つの事柄だけはたしかである。まず一つは、ブラジルでは心靈術が大変に興味の的になっていくこと、心靈術による病氣治療がすぐく沢山発生していること、病める肉体の組織やガンの如き腫瘍の無痛除去の驚くべき手術が有力な霊媒たちの手で定期的に行なわれていることである。どうやらブラジルとは異常さが急速に正常さに取ってかわりつつある国らしい。他の一つは、ブラジルはUFO事件の発生数が他国よりもはるかに多いという事実である。右の二つの事実に関係があるかは今後の課題である。

当分の間、安全錠はかけられたままだが、ブラジルでは物事はしばらくして洩れることがあるので、たぶん遅からずこの興味ある事件に関して多くの事がわかるだろう。



UF Oはまだれ  
地に現われ  
各る

### 車輪のついたUF O

ジョン・A・キール

今年三月末から四月初旬にかけて私はオハイオけい谷を広範囲に歩きまわったが、ここにあげるのは目撃者や「沈黙している」コンタクティーたちとインタヴューして得た事件でUF Oの地上活動に関して更に光を投げかけているもののなかの一つである。

#### 消えた建築物

一九六六年十月下旬の或る日（目撃者は正確な日付を記憶していない）オハイオ州ダンカンフォールズのレオナード・エルモア氏（七二）が午前四時頃散歩中に一個の不思議な「建物」に出会ってひどく恐れたという。多くの老人と同様にエルモア氏もよく眠れないので深夜長い散歩に出かける習慣があった。この異常な夜も彼は家から二丁離れた路上を歩いていたとき、広い野原のまんなかすわっている奇妙な「トタン小屋のように見えるL字型の建物」を見たのである。それまでこんな小屋など見たことがないので、もっとよく見ようと近寄った。するとその物体の何が彼をびっくりさせたので—なぜそれで恐れたかはあとでハッキリと説明できないという—一目散に逃げ出した。暗かったけれどもその「小屋」には窓もドアもないことがわかったが、中から普通の男の声が響いてくるのをはっきり聞いた。「逃げるな・

・・・逃げるな」とその声は呼びかけた。「わしは逃げたのではない。大急ぎで歩いただけじゃ」とエルモア氏は言う。

彼は急いで家に帰り、ファイルを取り出して現場へ引き返した。驚いたことに「小屋」はなくなっていた。この事件ですっかり気が転倒したために、妻の話によればそのあと本人は数日間神経障害にかかったという。彼は翌日保安官を呼んで目撃した物を報告することにきめた。保安官は出かけて調査しようと約束したが、ついに実行しなかった。エルモア氏はハツタリやぐずぐず考え込んだりする様子もなく率直な態度で話してくれた。彼は如何なる種類の空飛ぶ円盤を見たのではないと主張する。それは何かの「小屋」にすぎなかった・・・つまりちよっとのあいだそこにいて数分後にはなくなってしまう何物かなのだ。

筆者は彼がこの物体を見たと称する畑を注意深く調べたが、それは新しく建てられたダンカンフォールズ小学校のまうしろにある広い野原であった。

ダンカンフォールズはオハイオ州ローズヴィルから約二十マイルのところにある。その町でゼインズヴィルの雇われ理髪人ラルフ・ディター氏も一九六六年十一月に低空で飛んだ円型の物体を撮影したことがあり、同じ頃近隣の町々で多数のUF O目撃が発生している。

#### ニワトリ小屋のあいだで

一九六七年一月十日、退職教師の老人ウォーリー・バーネット（七七）が一個のUF Oから推定六十フィート以内に近寄った。ウ



★ストヴァージニア州ポイントプラズントから十二マイル離れた国道二号線沿いの農場に住んでいるバーネット氏は、その夜十時三十分頃に犬がほえているのを聞いて調べてみようかと外へ出た。彼は片方の耳がつんぼで杖をついて歩くけれども、精神は正常で、目撃した物をはっきり説明することができる。エルモアー氏と同様に彼も正直で率直な目撃者であるという印象を受ける。しかしエルモアー氏と違ってバーネットは目撃直後に大ざっぱな見取図とノートを作っている。

バーネットの家の背後にはきわめてけわしい丘がそびえている。そこには木があまりなく、細い谷が丘の斜面を下に伸びていて、バーネット氏が数匹の犬を飼っている犬小屋から数フィートの所で谷がつきている。彼が最初に物体を目撃したとき、それは丘の頂上で非常に大きな光のように見えた。見つめていると、それは丘へ降下してゆっくりと谷の方へ動いた。「フォルクスヴァーゲンの大ききくらいだった。窓（複数）があるようで、それらは明るく輝いていた。地面に近づいたとき燈火は消えた。物体の前面に二個の四インチばかりの赤色光があつて、それはもったままだった」とバーネット氏は言う。物体がなおも近くへ動いて来るにつれてバーネット氏は多くの小さな白色光を認めたが、その光は物体から飛び出てはまた帰ってゆくように思われた。「まるでスクウェアダンスをやっているようだったな」物体は周囲に小さな光を回転させながらゆっくりと無音のまま谷に沿ってやって来た。それはバーネット氏の位置から六十フィート以内に来てとまり、ニワトリ小屋のうしろへスッと入って見えなくなったので、バーネット氏はもっとよく見ようとその小屋をまわって行ってみ

たが、うしろ側へまわったときはいなくなっていた。べつに空中へ上昇したわけではないのに（上昇したとすれば見えたはずだ）簡単に消えてしまったのだ。彼は恐れはしなかった。首をひねっただけだった。

家族の者や友人たちは本人の正直さを保証した。「ウォリーが見たというのなら、たしかに見たのだ！」本人はそのことを新聞社や警察へ報告しなかった。空軍へ手紙を出そうかと考えたが結局出さなかった。

数日後、一人の地方牧師と説教会の会衆全員がウォリーの農場から約二マイルの所にある教会をヒューンと音をたてながら大きな赤い火の球が通過するのを見た。この物は地上を進行し、突然消えてしまった。

#### 目撃者脅迫される

一九六七年一月十九日の朝九時五分、ウェストヴァージニア州ダンバーのタド・ジョーンズ氏（三八）がチャールストン郊外約十マイルのあたりの州間連絡ハイウェイ六十四号線をドライブ中、路上約四フィートの空中に停止している大きな金属製球体に遭遇した。白屋でもあり、また約二分間見えていたので、ジョーンズ氏はその物体をきわめて詳細に説明できた。球体は径約二十フィートで、くすんだアルミニウムのような色を放っていた。四本の脚が突き出っていて、各脚の底部には脚車のような車輪がついていた。また径約九インチの小窓も見えたとし、物体の底部には「プロペラ」があったが、氏が見たときは空転していた。まもなくこの

プロペラが急速に回転を始め、物体は浮かび上がって空中に消えて行った。

ウェストヴァージニア州クロスレインズで小機械器具店の経営者であるジョーンズ氏は、筆者の調査旅行中に会った最も印象的な目撃者の一人である。彼は言語の明晰な高い教育を受けた人で、酒をやらす、教会や市民の行事のリーダーでもある。彼との数度にわたる会見の一つで他にもう一人の記者が同席したが、同じような印象を受けたということだ。

われわれは目撃の正確な地点を訪れたが（事件発生後三ヶ月目）その物体は地下を通っている大ガス管の真上の空間に停止していたことがわかった。しかも道路のそばの泥の中に一連の非常に奇妙な足跡が残っているのを見つけたのである。その足跡のなかの一群は昨年十二月にポイントプレゼントの北方にある強力火薬庫で見つけたのと同じであった。それは巨大な犬の足跡のように見えたが、犬ではなく、きわめて深い跡なのでその動物は二百ないし四百ポンドの重量があるにちがひなかった。足跡をあれこれさぐって見たが、チャールストンの動物に関する権威者のだれ一人として正体をつきとめることはできなかった。加うるに異常に大きなサイズの、人間の素足であると思われる片方の足跡が一個あった。また波紋状のカカトのついたクツをはいた人間の足跡が数個残っていた。これらの足跡の間隔は最も奇妙なものであった。それにどこから来たのか、どこへ行ったのかもわからない。ハイウェイのこのあたりは（四車線のスパー・ハイウェイ）全く淋しい場所で、木はまばらにしか生えていないため、ハンターがそんな足跡を残したとは考えられないことである。

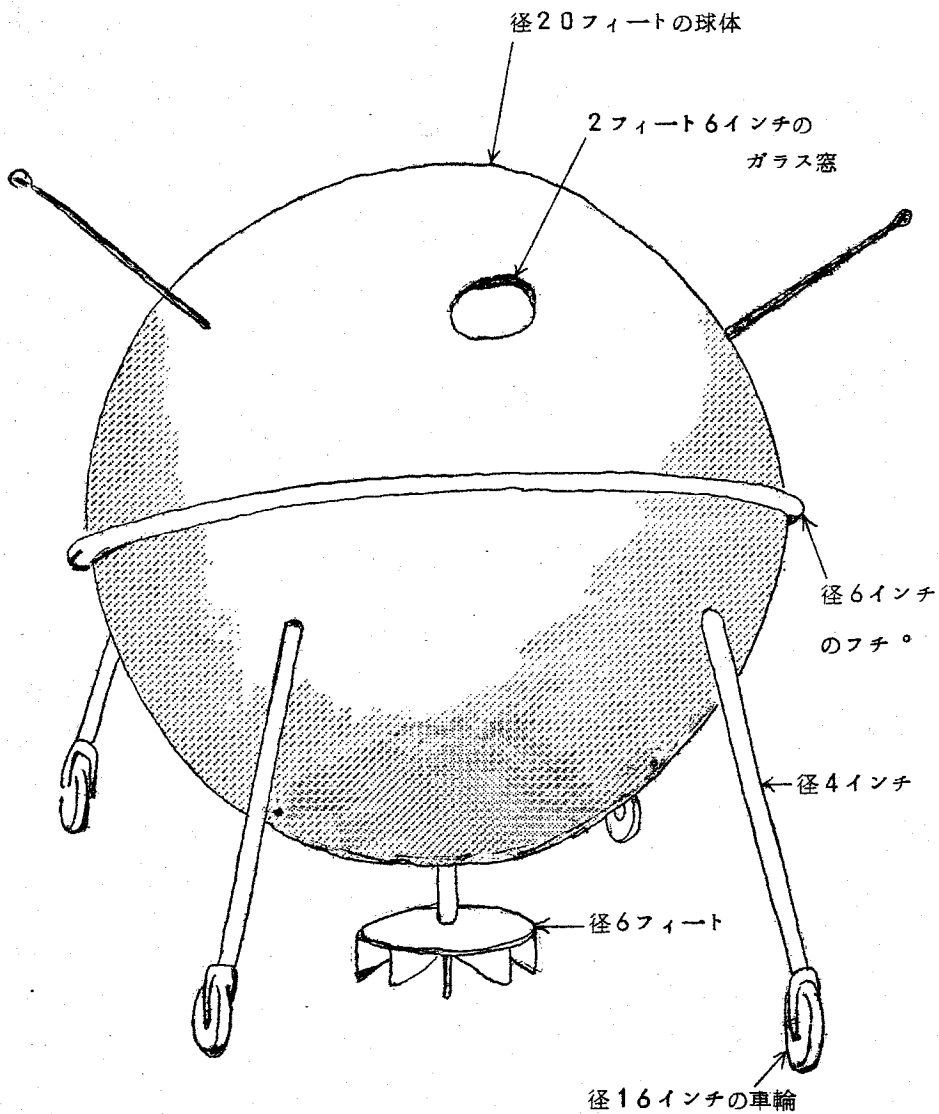
質問を続けてゆくうち、ジョーンズ氏は別な二件の出来事を思い出した。事件当時はそれについてあまり深い考えを起さなかったのである。最初の目撃後一週間ほどしてからジョーンズ氏は朝の同じ時刻に同じハイウェイをドライブしていた。店へ行く途中である。そのとき例のUFOのいた現場の路傍に一人の男が立っているのを見た。たぶんヒッチハイクをやっている、この人気がない場所で立往生したのだろうと思い、氏はトラックをゆるめて乗れと言った。男は答えないで手を振って「行け」と合図しただけだった。翌朝この男が同じ場所にいたけれども今度は氏は車をゆるめなかった。男は青い服と眉庇のついた青い帽子を身につけていた。顔は普通だが、日焼けしたような赤ら顔に見えた。片方の手に奇妙な時計のような道具を持っている。その表面には大きなダイヤルがあり、それから針金が一本出て別な手がそれをにぎっていた。

この話を聞いた筆者はだだちに土地のガス会社へ連絡して、現場地域へガス管調査に係員を出していたか、またそういう器具を用いるかどうか照会したが、答は「ノー」だった。

一月十九日の彼の目撃の翌日、紙片がダンパーのジョーンズ氏のドアの下へそっと入れられた。普通のノートブック用紙一枚に鉛筆で書かれた走り書きには次のように記してあった。「あなたが何を見たかはわかっているし、あなたがしゃべったこともわかっている。黙っているほうがいいぞ」この文句はれいれいしくポイントの別な目撃者のドアの下へ投げ入れられた紙片の走り書きと同じ字体である。数日後に別な紙片がジョーンズ氏のドア

車輪のついた UFO

の下に入れられたが、今度はボール紙に書かれてあり「もう注意はしない」とあった。ジョーンズ氏はこれらをいたずらだと考えていた。



ルック  
空飛ぶ円盤特集号

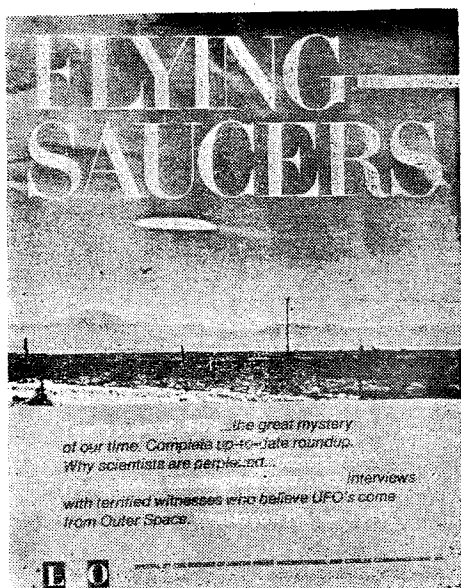
米国の有名誌ルックが、「フライイング・ソーサーズ」と題する空飛ぶ円盤の特集号を出したので紹介しよう。三十四センチ×二十七センチ、大判六十六ページの堂々たるもので、豊富な写真と詳細な解説により、戦後一般化した円盤問題の経緯がだれにもわかる仕組になっている。しかも円盤否定論者の見解までかかかってあって、編集態度が公正で中立的なのはよい。掲載されたUFO写真は約三十葉、そのうちカラーが四葉、別にいたずらと判明したUFO写真が数葉載せてあるが、アダムスキーには全然触れていない。A氏の真偽に關しては一切言明を避けたという態度である。ここに出ているUFO写真は過去円盤研究界で何度も引合いに出されたものばかりで筆者には珍しくないが（筆者はかつてこれらの写真の殆どを所持していた）、初学者にはUFO入門用として絶好のものだといえよう。解説の英文も平易で、紙質印刷の優秀さと相まって各国のUFO関係文献中最高位といえるもの一つである。

まず表紙写真にはカラーによる黄白色の細長いUFOが現われているが、これぞニューメキシコ州ホロマン空軍基地付近で一九五七年十月十六日にメスカレロ土民保留地インディアン局の看護婦エラ・ルイス・フォーチュンが撮影した名高いカ

ラー写真である。

表紙をめくるとその裏に編集者デイヴィッド・C・ホワイトニの序言があり、続く三頁から四頁にかけて（この雑誌は表紙が第一頁となっている）「科学的事実か？ それとも空想科学物語か？」と題して戦後話題となった円盤問題発展の概要を述べ、更に米国の有名な円盤調査四人男、ノースウェスタン大学天文学部長で米空軍顧問のH・アレン・ハイネック博士、スミソニアン天文台のドナルド・H・メンゼル博士、NICAP（空中現象調査会）会長ドナルド・E・キーホー（注||ただしNICAPと称するグループは米国に数種類あるが、これはその最大のもので会員数五千五百）、コロラド大学の米空軍後援UFO調査団長エドワード・コンドン博士らの顔写真と共にそれぞれの見解が掲げてあ

下の写真は表紙



るが、要約すれば次のとおりだ。「過去十八年間解決を求めてきたが、実際にはよくわからない。自分も空軍も不可解な報告を隠しはしなかった(ハイネック)」「生命はどこにも存在すると思ふが、円盤とは関係ない。円盤は大昔の竜、幽霊、海の怪物などと同様、現代の迷信であり、恐怖や不安の産物だ(メンゼル)」(注IIメンゼルは円盤否定論者として名高い)「コンドン博士の調査団が、円盤が実在し、知的に操縦されていて、大気圏外から来るといふことが言えない理由がわからない。円盤は実在する(キーホー)」これに続いて米国の民間円盤研究団体で最古の歴史を持つAPRO(空中現象調査団)の、UFOが他の惑星から来るとは事実が示しているという見解がはさんである。一方、空軍科学局の一九六五年の声明として「各天文台はぼう大な時間をかけて天体観測を続けてきたが、天体写真のただの一枚にもUFOは現われなかったし眼視観測もされなかった」という否定的言葉も引用してある。しかし民間航空のヴェテラン・パイロットは多くのUFOを報告しているし、有名なUFO事件の多くは不可解である。「これらのUFO物語のなかには、『古典的事件』になつたものもあるが、そのうちの十件を本誌で紹介しよう。一体UFOとは何か? 科学的事実か、空想科学物語か?」と結んであつて、次に五頁へ入る。


ここには紙面の右上に大きくケネス・アーノルドの顔写真がのせてあり、左手に緑色の大きな見出しで「最初に言いだした男」とあつて、その下に「信頼に足るケネス・アーノルドは、『ソーサー』(コヒー台皿)のように飛んだ、神秘の物体を最初に報告した人だつた。現在彼はUFOは、機械というよりもむしろ生きて

いる」と信じている」と小見出しがついて、その詳細な体験談が六頁まで続いている。(注IIアーノルドは円盤研究界で知らぬ人はないほどに名高い。『フライイング・ソーサー』(空飛ぶ円盤)の名付親的存在。彼の体験を契機として現代の円盤時代が急速に展開した)それによると、一九四七年六月二十四日午後二時頃、アイダホ州ボイスの会社々長アーノルドはワシントン州チヘリース空港から自家用機でヤキモ目指して離陸した。途中レイニア山の南西側に落ちたと思われる海兵隊の大型輸送機を探索したために一時間ほど遅れたが、この飛行は快適だった。すると突然レイニア山の北方に九個の奇妙な物体が出現したのである。太陽を反射してさん然と輝くこの物体はガ鳥のように並んで飛んでおり、端から端までは五マイルあつた。しかし権威筋はこの現象をしん気楼と片づけた。彼はその後も数度UFOを目撃したが、彼の印象では円盤は単なる機械というよりもなにか生きた物で、魚のように自由に進行方向を変えることのできる有機体のものであるといふ。そして絶対に幻覚やしん気楼ではないと断言している。六頁の写真には再び愛機の前に立つ彼の勇姿が出ている。七頁にはメンゼル博士提供の大きなしん気楼写真が載せてあり、山脈の上空に幻のような山並が写っていて、このような現象は晴れた日の特殊な温度下で起こりやすいと説明している。

続いて十頁から十一頁にかけてはカール・ハイト少年が撮つた名高いUFOの大群の写真が掲げてある。これは一九五一年八月三十一日夜、開いた窓の下のベッドに横たわっていた少年が急スピードで夜空を飛ぶ光体群を目撃するや急いでコダック35ミリカメラをつかみ庭へ飛び出て撮影したもので、『ラボックの光体群』

として大センセイションをまき起こした(注||この写真はアダムスキー・レズリー共著「空飛ぶ円盤実見記」に出ている)。しかし空軍はこれを鳥の群としたのである。ところが実は同夜ラボックの町に住む地質学者W・I・ロビンソン博士宅の裏庭で流星を観測していたテキサス工大のW・L・ダカー教授とA・G・オーバーク博士の三人も九時二十分頃に十五ないし二十個の黄白色の光体が北から南へ飛ぶのを目撃した。一時間後には第二のグループが半円型の編隊で飛び、十二時ちょっと前には第三のグループが上空を通過した。教授連もこれを千鳥の群れと考えたが、当時空軍のUFO調査団のリーダーであった故ルッペルト大尉は「インチキともホンモノとも言えない」と述べており、現在この写真は空軍の未解決資料として保管中である。以来ラボックの町はUFO目撃の名所になっているという。

十二頁に移ろう。ここは「円盤(複数)がワシントン市を訪れた日」という見出しのもとに、一九五二年七月に数度円盤がワシントン市上空に出現した模様が述べてある。すなわち七月十九日の真夜中に八機の円盤が首都の上空で乱舞しナッシュビル空港の管制塔のリーダースクープに現われた。続く二十日、二十三日、二十六、七日、二十八、九日にも目撃された。これはワシントン市にとって最大の神秘的事件で、ついに空軍も腰をあげて活動を開始した。十二頁には円盤を追跡するために放たれた第一四二戦闘機中隊のパイロット三名が機の前で談笑している写真があり、十三頁の写真にはワシントン市のナッシュビル空港リーダー係員が三名写っていて、中央のハリー・バートンは「あのとき何かがあったのだ」と今なお思っているという。

十四頁から十五頁にはO l h a o d i s c o ! (空飛ぶ円盤)という大きな見出しのもとにブラジルの有名な円盤写真が掲載されている。右頁は紙面一杯の大幅写真で、左頁は円盤だけを拡大したもの。かなり粒子の荒れた  のような形のこの写真は多くの円盤関係文献によく用いられている。説明によると一九五七年から五八年にかけて国際地球観測年に、ブラジルは海軍の艦船アルミサンテ・サルダナ号を海上科学研究所に仕立てたが、これがブラジル東海岸から六百マイル沖のトリニダード島から打ち上げられた気象観測気球を追跡していたとき、二月二十一日の正午すぎ、乗船していたブラジル海軍将校が円盤を発見した。たまたま甲板上でカメラを持っていた民間プロカメラマンのアルミロ・バラウナが続げさまに六枚ほど撮ったなかの一枚がこれである。トリニダード島の海岸の岩山上空に浮かぶこの円盤は出現してから三十秒以内に消えたという。

十六頁には一九六四年四月二十四日にニューメキシコ州ソコロの警官ロニー・ザモラが、白い卵型の物体が着陸して離陸するのを目撃した事件について詳細な説明があり、右上に地面上の痕跡と右下にザモラの写真が出ている。その物体のかたわらには白い作業衣らしきものを着た人間の形をした物が二つおり、その背後は約四フィートであったが、「小人を見たと言ったのではない」とザモラは激しく主張する(注||この事件に関してはかつて日本GAPニューズレターに記事を掲載した)。

次にドカッと大見出しで載っているのがエクセター物体だ。一九六五年九月三日午前二時すぎにニューハンプシャー州エクセターという小さな町付近で、ノーマン・ムスカレロという十八才

の少年が郷里のエクセターへヒッチハイクの途中、突如無音の強烈に輝く物体が出現し、野原を横切って彼の方へやって来た（注）この事件もニューズレターで紹介済）。恐れた少年は近くの家へ走り寄ってドアをたたいたが、住人は酔っぱらいだと思って戸を開かなかつた。そこで彼は狂気の如く道路へ飛び出て一台の車をとめて警察へ急報した。警官パートランドはちょうど国道一〇一号線で車をとめて気運いのようになっていた一人の女を発見したところだが、それが語るところによると一個の赤い光を放つ無音の物体が約九マイルもあとをつけてきて、車の数フィート以内にまで近寄ったという。これについてジョン・フリーラーは「エクセターの事件」と題する著書の中で詳細に説明しており、その一部が引用してあるがここでは省略する。

十八頁から十九頁にかけては「フットボール競技場のように見えた」と題して一九六五年九月三日にテキサス州ダモン付近で、みずから「石頭」と称する保安官ボブ・グールドと同僚のビリー・マッコイが目撃した物体に関する解説が出ており、上部にはその見取図も掲げている。石頭グールドの答はただ一つ「それは別な惑星から来た物だ」詳細な説明が二頁にわたって続くが、紙面の都合によりこれも省略。

続いて二十頁にはUFOと思われる物体が実はIFO（確認飛行体）であったという実例として、一九六二年九月五日の早朝米国中西部一帯を飛んだ不思議な赤白色体の事件が詳説してある。「落下したソ連の人工衛星」という見出しで、六州とカナダの住民がこれを目撃して最初はUFOだということで大騒ぎとなったが、結局スプートニク四号の燃えカスらしいということがわかってケ

リがついた。右側の二十一頁にはその二十ポンドの破片が大きく写されている。


さて二十二、三頁には昨年三月にミシガン州を震かさせたUFO事件が各種の写真と共に解説してあるが、これは例のノースウェスタン大学のアレン・ハイネック博士が「沼地のガスが燃えたのだ」と言明して話題となった事件である（注）これもニューズレターで報導した）。これは一九六六年度のUFO事件としては最大のもので、場所はミシガン州南東部のデクスターという町と四十五マイル離れた大学のキャンパス。目撃者としてスターの脚光を浴びたのは一農夫、十二名の警官、六十二名の女子学生、民間防衛の一指揮者、ヤギひげをはやした一科学者、それに早春の残雪である。これは三月十九、二十、二十一日と二十八日の四日に発生した。空軍はハイネックの推測にもとづいて沼のガス説で片づけようとしたが、目撃者全員が激しく抗議して、特に十九日の目撃者シュナイダー巡査部長は「空軍はバカばかり言っている。私にはわかってるんだ」と言う。一緒に目撃した保安官デヴィッド・フィッツパトリックが撮った一連のUFO写真をハイネックは三日月と金星を繰速シャッターで撮ったものだと説明した。二十一日夜はデクスターから四十五マイルの所のヒルズデイル大学のキャンパスがUFOの着陸場所となった。少なくとも六十二名の女子学生が寮の窓から一齋に顔を出してこの光景を眺めたが、これは数時間続いた。これもハイネックは突然の雪解けで沼地から出るガスが輝いたのだと言う。「つぶれたフットボールのようだった」と一年生のホリー・デヴィスはハイネックに反発する。「陰気な沼地はおよそ大気圏外から人間が訪問して来



「そうな場所ではない」とハイネックはデトロイトの記者クラブで百名の記者団を前に説明してその科学的推論を述べた模様がでてくる（注||ハイネックはかつてアダムスキーの円盤写真をヒナ鳥の人工フ化器を撮影したのだと言明したことがある）。二十二、三頁の上部にはヒルズデイル・カレッジの女子学生四名が寮の窓から夜空を見上げている写真がある。左下にはヒルズデイルのウィリアム・ヴァン・ホーン氏が撮影した円盤写真があり、本人はこの物体は沼のガスではないと述べているという。右頁の右側上部にはミシガン州ロイヤルオークで三月二十八日にロイヤルオーク・トリビュン紙のカメラマン、リチャード・ハントが撮影したUFO写真があつて、その下部には記者会見中のハイネックの横顔が写っている。

二十四頁からはすぐれた円盤写真が続々と現われて読者の心を躍らせる。この頁には大戦後米軍が打ち上げてしばしば円盤とまちがえられた気象観測気球が写されているが、右頁には一九四七年七月にケアリフォルニア沖合のカタリナ島上空に現われた白い卵型物体、一九五〇年の春オレゴン州マクミンギル付近で農夫ポール・トレント撮影の黒い円盤の写真が載っている。二十六頁にはマサチューセッツ州セイレムの沿岸警備隊カメラマンS・R・アルパートが写した四個の輪郭不鮮明な大きな白光体、右頁には一九五二年ニュージャージー州パサイクの自宅の庭で写真愛好家のジョージ・J・ストックが撮った七枚の円盤写真中の二枚が出ており、その内一枚は上部にドームのあるアダムスキー型円盤の特徴を示している。二十八頁へゆくと、一九五四年にシシリイ島タオルミナでイタリヤ人ジュセッペ・グラッソが撮った有名な

写真、すなわち上空に舞う白い二個の円盤を四名の男がサクそばで見つめている場面が出てくる。説明によると、否定論者のメンゼル博士はこの写真の真实性に疑惑を起し、その理由として二個の円盤の片側の黒い陰が一定方向にできていないこと、四人の男が上空を見ないで下方を見ていることなどを指摘した。のちにグラッソはその物体は気球で、一個は後に山中で発見された写真相を明かした。「だがそのときは円盤のように見えたので、みんなもそう思っていていたんだ」と言っている。したがってメンゼルの疑惑も的はずれであったという次第。右側二十九頁の上部には一九五五年五月十五日にウォレン・シーグモンドというテレビ技師がニューヨーク市の自宅の屋上できれいなフランス娘を撮影しているとき、突如現われたUFOにまず娘が気づいて急いで撮ったという写真がある。空軍もこの写真を調査したが、少数の不可解な例の一つとして保管したという。その下部には、これも円盤写真としてユビーが流布したことのある巨大な円盤型の雲が二つ写っている写真がある。所はフランスのマルセーユ。米海軍が一九五五年に公表したもので、このような円盤型雲は米国北西部でもよく見られるという。とにかく円盤ではない。

三十頁には紙面一杯の大判写真に  の形をしたUFOが現われている。一九五九年にコペンハーゲンで二人の少年が撮ったもの。右頁にはこれも大判写真で、一九五二年にペルーのマドレ・ディオス地区のジャングル上を白煙をたなびかせて飛ぶ葉巻型物体を示している。三十二頁には太陽のコロナに似た輪郭を持つ大きな白光体のUFO写真がある。マイアミでニューズ映画カメラマン、ラルフ・メイヤーが一九五二年に海兵隊員としてそこ

に駐屯していたときに撮ったもの。これは16ミリ映画フィルムの一コマから引伸ばしたもので、物体は約五十フィートの長さがあり、気味の悪い赤黄色を帯びていたとメイヤーは言っている。これもUFO写真としてよく知られている。

三十三頁には「珍しいカラー写真」と題してUFOのカラー写真が撮られた実例の解説文があり、三十四頁から五頁にかけて四葉の見事なカラーUFO写真が掲載してある。左頁には一九六五年八月二日にオクラホマ州タルサで十四才の少年アラン・スミスが撮った赤、緑、黄などの色を帯びた数種の色光体の写真があり、まさにアプストラクト画の観を呈しているが、これは全体が一個の物体なのである。その隣りにあるのはオーストラリアの或る会社社長が一九六六年四月二日にメルボルン郊外のポールウィンで撮った茶色のUFOの形をしたUFO写真。本人は嘲笑されるのを恐れて名を秘めている。物体の下部が地上の赤い建物を反射して赤く光っているところをみると高度に研磨された金属らしいという。右頁は表紙に用いられた例のフォーチュン嬢が撮った写真。その下にあるのは一九六五年十月二十一日にミネソタ州セントジョージ付近で保安官アーサー・ストロイチが四人の仲間と共に狩猟旅行中、午前六時十分頃にコダック・インスタマティック・カメラで撮ったUFO。○型物体の中心部が黄白色で周囲が赤く輝いている。

三十六頁からは再び白黒UFO写真となり、左頁には米空軍が一九五二年に打ち上げた気球が出ていて、この気球が五年の円盤ラッシュの一原因であったと考えられるとあり、右頁にはリオデジャネイロの雑誌オ・クルセイロのカメラマン、エド・ケフェ

ルが一九五二年五月七日にリオの郊外で撮った見事なフライパン型円盤写真が掲載されている。続いて四十二頁までは各地で撮られた円盤写真が次々と展開し、特に四十三頁には一九六六年七月三十日にペンシルヴェイニア州エルウッド市の高校数学教師ジョーゼフ・ヨーストが撮った五角形のUFO写真が出ている。その上部には同じくペ州のイーリー付近プレスパーク半島の砂上に着陸したキノコ型UFOに関連して砂上に残された不気味なツメ跡の写真がある。

四十四頁から四十九頁にわたっては、いたずらと判明したニセ円盤写真やトリック写真が数葉掲げてあり、詳細な記事がつけてあるが、特に面白いのは四十九頁上部に出ている「他の惑星から来た奇妙な侵略者か？」というキャプションの写真だ。奇怪な生物らしきものが地上に立っていて、そばには円盤が着陸しているが、実はユネティカット州プリストルのニンジン畑で写したニンジンを組み合わせて怪物とみせかけたもので、円盤らしき物はクズ入れカンのフタの上に安全帽をのせたトリック写真である。五十頁から五十三頁までは地球の科学者が製作した円盤の話が写真入りで出ている。就中一時話題になったカナダのAVRO航空機会社が開発した円盤型アヴロ・カーは一九六〇年に公開されたが、六五年には中止となった。空中に数フィートしか浮上しないからだという。パルティモアリーの発明家オティス・T・カーが一九五九年に発明したと称する「自由エネルギー利用の宇宙船」の興味ある写真が五十二頁に出ている。彼によればこの宇宙船はパルティモアリーからワシントンへ飛行機が飛ぶのと同じくらい容易に月へ到達するというが、二年後には計画に失望してしまった。

この宇宙船を国防省へ提供しようと申し出たのに拒絶されたからだという。右頁には一九四九年にメアリランド州マーレイパークの一軒の廢屋中で円盤型航空機の一部が発見された珍しい写真が収めてある。第二次大戦前にこんな航空機を建造して消えうせた発明家の正体は不明だとある。

五十四頁には「信ずる者たちよ、集まれ！」と題して、米国の主な円盤大会について説明しているが、この記事は少々からかい気味である。五十五頁にはその大会の一端として、ケアリフォルニア州南部のジャイアントロックで一九六六年十月に開催された第十三回宇宙機大会の大きな写真が載せてあり、参会者約五千人のなかには自家用飛行機で飛来した者もあるというので、下段の写真を見ると、なるほど自家用機が会場の端にずらりと並んでいる。説明によると、或る円盤狂たちにとって空飛ぶ円盤は重大問題であるのみならず、ゼニがもうかる問題でもあるという。彼らはこの日に円盤関係の図書や写真を売ってもらうからだ（注|| アダムスキーはジャイアントロックのお祭り騒ぎを極端に嫌い、招待されても応じなかった）。続く五十六頁にも円盤大会の模様が表示されているが、これはミズーリ州マウンテンビューの一九五八年度円盤大会の写真で、露外の特設売場で円盤関係図書が販売されている。下段は名の知られた自称コンタクトティーの農夫バック・ネルソンが「宇宙機大会」と書いた標識を手している写真がある。彼は火星、金星、月へ行つたという体験を会場で語った。

そこで五十七、八頁には円盤やその乗員とコンタクトしたという数名の名高い人々の体験が紹介される。まず最初に出てくるの

が、「ホワイトサンズ事件」で知られるダニエル・フライだ。フライは一九五〇年七月四日の夜、ニューメキシコ州ホワイトサンズ付近の砂漠で小型円盤に遭遇し、それに乗せられて現場からニューヨークまで数千マイルを約三十分で飛んだという。この円盤は無人機で、上空の母船から遠隔操縦によって作動したもので、と言っている。（注|| 編者はこの体験記の原書を所持しているの

で、他日詳細を紹介する予定）次にニューメキシコ州アルバカークの機械工ポール・ヴィラは一九五三年に宇宙人とテレパシーで会話したというが、十年後の六三年六月十六日、またもテレパシーで或る場所へ行けという指令を受けて午後二時頃にアルバカークの南十五マイルの地点へ行つたところ、着陸した宇宙機から出てきた五名の女と四名の男から成る乗員に会った。彼らは身長七ないし九フィートの美しい人々で、頭髮は金髪、赤、黒などであった。髪の毛座（注|| 北天の星座。牛飼い座と獅子座の間にある）から来たという。そのうち径約七十フィートの宇宙船で離陸し、上空に約二時間停止していた。

続いて出てくるのがウェストヴァージニア州パーカーズバーグで働くセールズマン、ウッドロウ・デレンバーガーの比較的最近の物語。彼は一九六六年十一月二日、オハイオ州マリエッタからパーカーズバーグにむかってドライブ中、金属製のまっ黒い物体が前方に着陸して車をとめさせた。そして中から出てきた人物と車の窓越しに十分間ほど話し合った。相手の男は青いきらきら輝く服を着ており、「心配しなさんな。われわれはあなたの国（米

国）ほどに強くない国から来たのです。あなたを傷つけはしませ

ん」と言った。

相手はテレパシーの能力を持ち、身長六フィート、三十五才ないし四十才くらいで、黒人であった。遠くの燈火を見てあれは何かと聞くので、パーカーズバーグの町だと答えると、自分の国のあのような場所は集会所と呼ばれるのだと言った。別れる前にまたコンタクトしようと約束して、上空に待機していた円盤が再び降りると、それに乗り込んで、すさまじいスピードで離陸して行ったという。五十七頁には坊主頭のデレンバーガーの写真が出ている。

お次の番はブラジルの名高いコンタクトマン、アントニオ・ヴィリヤス・ベアスである(注||この体験記もかつてニューズレターで伝えられたが、当時は本名がわからず、アドヘマールという仮名で報導されていた)。一九五七年十月十五日に曇さを避けて夜間に働いていた彼は、突如着陸した巨大な卵のような宇宙船から出てきた五名の宇宙人に捕えられて船内に連れ込まれ、衣服を脱がされた上、一室に閉じ込められた。やがて現われたのは全裸の奇妙な美女である。すきとおるような肌。白色に近い金髪。顔は両眼のつり上がった中国人に似ている。そして約四時間半アントニオを特別に「もてなしてくれ」後に部屋を出て行き、続いてアントニオも解放され、宇宙船は去って行った。五十八頁には当時二十三才の農夫アントニオが事件後すぐに医師から身体検査を受けている場面の写真が出ている。(注||この事件は円盤研究界で大問題となり、フライイング・ソーサー・レビュー誌もたびたび調査報告を掲載した)

一九五二年にはフロリダ州ウェストパームビーチ付近の森林中

に着陸した円盤に、J・D・デスヴァーアジスという金物セールスマンで少年団長をやっている男が接近しすぎたために腕の毛が焦げるという事件が発生した。当時三十才の彼は道路近くの光のフラッシュを眺めていたら、円盤から出た「火の玉」がかすめたという。この頁の中央には右手で左腕の焦げ跡を指しているデスヴァーアジスの写真がある。

右端に出ている紹介記事は円盤事件として最も有名なものの一つで、ニューハンブッシュ州ポートマスのバーニー(四四)とベティ(四六)夫妻は、一九六一年九月十九日の夜モントリオールの休暇からポートマスへ帰る途中、一個の輝く物体が出現し、六名の「人間らしき」生物によって車を停止させられ、宇宙船へ連れ込まれた。宇宙人たちは夫妻を詳細に身体検査したが、特にベティは六インチの針をヘソの中にさし込まれた。これは妊娠のテストだと聞かされた。そのあと車へ返され、二時間遅れて家に着いた。二人は不安になったのでポストンの精神科医ベンジャミン・シモンのところへ行った。シモンが夫妻に別々に催眠術をかけてしゃべらせてみると、事実上矛盾のない話をした。作家のジョン・フリーラーが「邪魔された旅」と題する著書のなかでヒル夫妻の詳細な体験を書いている。上方にはヒル夫妻(バーニーは黒人で、妻のベティは白人)、下方には精神病医シモンの写真が出ている。

五十九頁には「心理学者はどう考えるか? 彼らも意見が一致しない」と題して二名の権威者レオ・スプリング博士とリチャード・ユーツ博士の見解が掲げられている。その全訳を掲載できないのは残念だが、結論からいうとス博士は円盤肯定論者でユ博士は

否定論者である。ワイオミング大学心理学教授のス博士は一九五一年の或る夜友人と一緒にUFOを目撃してから非常な興味を持つようになり、更に一九五七年の夏、夫人とコロラド州ブルダー付近をドライブ中にまたもUFOを目撃してからのこの方面の研究を始め、一かどの権威者になった。彼の調査によると真実のUFO目撃は大体に送電線や水源地の付近で起こるといふ。地球は他の惑星の人間によって調査されているというのがス博士の個人的見解である。一方否定論者のユ博士はコロンビア大学バーナー・カレッジの心理学科長で、彼の説によればUFOとは実は人間が何かの強い光を見たあとに残る残像現象だといふ。彼が東部心理学会の席上でこの説をとなえたら科学者たちから笑われたといふ体験を持つ。しかし彼は自説をまげない。

さて大詰近い六十頁には「われわれはUFOに関して何をやっているか」という見出しのもとに、米空軍のUFO調査機関である「ブルー・ブック計画」のスタッフ五名の写真が大きく掲載され、右の六十一頁にはその詳細な紹介記事がある。この本部はオハイオ州デイトン付近のライトパタス空軍基地内の空軍研究開発司令部にあり、主任はヘクター・キンタニラ空軍少佐で、彼はサンアントニオのセントメアリーズ大学卒の物理学者。十八年間空軍に勤務しているがユーモアのセンスある愉快な忍耐強い人。この部下として軍人二名、女二名おり、計五名が写っているが、みな若くはない。人員がたったこれだけというのも少々意外だ。この他に例のハイネック博士が顧問としてときどきやって来る。

空軍は昨秋から別な研究機関として三十万ドルの予算で十八ヵ月にわたるグループを組織した。その長はコロラド大学物理学教

授エドワード・U・コンドン博士で、まだ殆ど成果をあげていないが、この研究には他大学から百名ほどの科学者を動員し、一九六八年の始めには完了するという。そのときは結果が公開される予定。六十一頁右端には空軍へ報告されたUFO目撃報告数を年度別に分類した表が出ているが、これは興味深い。それによると一九五二年の目撃報告数が全部で一〇五一件、そのうち未確認とされたものが三〇三件でこの年が最も多く、その後は減少している。下段には六六年度の報告数の内訳が次のように出ている。天体の見誤り一九九、航空機一九五、気球二〇、不十分な資料一〇三、その他のもの七一、人工衛星一〇〇、未確認一三、審議中のもの一五五、計八五六件。

さてこの特集号の最後には「あなたがUFOを見た場合にはどうすればよいか」と題して注意事項が記してある。要約すると次のとおり。「自分がUFOを見たと思えば、もよりの空軍基地へ報告せよ。各基地にはUFO係調査官が少なくとも一名はいる。総監督はライトパタス基地にいるキンタニラ少佐である。近くに空軍基地がなければ警察かハイウェイのパトロールへ報告せよ。次にかかげるのは目撃報告者に渡される空軍の公式調査用紙である」となっていて、八頁に及ぶ質問書の見本が付録としてつけてあるが、この内容は実にうまくできていて、われわれがアンケートを取る場合のよい参考になる。

結論。この特集号の編集は全く見事なもので、円盤に関心を持つ人の必読の書であるといえよう。

## 編集後記

◎「予言」と題するハニー氏の論文は同氏が発行する機関誌七、八、九月号に連載されたものの全訳で、未完だという事です。かねてから氏は時機が来たら聖書の予言解説のキイを授けようと約束していましたが、それを果たした事になります。旧約聖書に出てくる「イスラエルの家」の正体を知ることがキイだというわけです。旧約と対照して読むとよいでしょう。

◎「モロドヴィンテム丘の怪死事件」は英国のフライイング・ソーサーレヴュー誌六七年第二号に掲載された記事の全訳で、「車輪のついたUFO」は同誌六七年第三号にのった記事の全訳です。（日本GAPはフライイング・ソーサーレヴュー誌主筆チャールズ・ボウエン氏から翻訳転載権を獲得済）

◎ルック誌空飛ぶ円盤特集号の紹介記事掲載は日本洋販の柴山事業部長のご厚意によりました。感謝します。この英文版はすばらしいもので、英語の読める人はぜひ一冊お求め下さい。入手希望の方は直接左記へ代金を添えてお申込下さい。同社より直送されます。一般書店にはありません。

東京都新宿区西大久保三丁目一〇番地

日本洋書販売配給株式会社 事業部長 柴山 毅（宛）

ルック・円盤特集号 一部定価五〇〇円 送料七五円

◎日本GAP幹部で商業美術家の宮内温夫（神奈川県逗子市在住）は今年度日本宣伝美術展で奨励賞を獲得致しました。彼は神秘的な雰囲気のためよう作品を得意とする若手ホープで、来年度の日宣美展にはアダムスキー著「生命の科学」のポスターを出品する計画との由、今度こそ最高の授賞を期待します。

◎アダムスキー著「生命の科学」（一部三〇〇円、送料五五円）と「宇宙哲学」（一部三〇〇円、送料五〇円）は在庫あります。未入手の方は早目にご注文下さい。注文は久保田宛に願います。◎本誌旧号は第28、29、30、32、33、34号が若干在庫あります。

各一三〇円。一括注文の場合、送料は不要。

◎日本GAPの副機関誌「宇宙同好通信（月刊）」も発行されています。購読希望の方は左記へお申込下さい。本部では取扱っていません。一部送料共一二五円。年間予約は送料共千円。

東京都豊島区雑司谷一丁目二九番七号、太田方 安斎純夫

◎日本GAP東京支部の月例研究会も開催されています。会員の方は気軽にご参加下さい。毎月第一、第三日曜日午前十時より夕方まで。宇宙哲学の研修、研究発表、懇親等。会場は次の通り。

東京都世田谷区成城町五六一 中田晴久宅 電話（四八三〇一三五〇）小田急線「成城学園」駅下車。北口から出て北方へ徒歩約十二分。昼食は会場で用意。

◎誌代切れの方には本誌発送時に「誌代切れ」と記した紙片と振替用紙を同封します。資金難で発行が遅れがちになりますので、よろしくお願ひします。

◎最近ソ連の金星四号が軟着陸した結果、金星の大気は大部分が炭酸ガスであって人間の住めそうな惑星ではないと報導されましたが、これは虚報であると思います。この緊迫した国際情勢下でソ連が真実の発表をするとは考えられません。各国GAPからの情報を待つことにします。（久）

日本GAPニューズレター 1967 第三五号

翻訳編集発行人 久保田八郎

発行所 日本GAP

島根県益田市益田古川

振替・松江 二六三〇

（久保田八郎個人名義）

昭和42年 発行  
10月25日  
不定期刊

頒価一三〇円・送料三五円

禁無断転載